喚喩的思考と提喩的思考に基づく行動様式

村　越　行　雄

1　はじめに

言語に関する興味は世界的にも極めて大きく、特にコミュニケーションとの関係で注目度が急上昇している。それに伴い、レトリックに関する関心も極めて大きなものになっている。その1つとして、例えば、代表的な比喩である隠喩、喚喩、提喩があり、それらは多くの人に意識され、使用され、分析されている。しかし、それらの比喩を考える時、ただ単に言語表現の技術としてだけでなく、言語以外の領域にも同様のことが見られる。ただ、人々の注目が言語表現としての比喩に向けられ、それ以外のところにはなかなか向けられていないのが現実である。そこで、今回は、比喩、特に喚喩と提喩に注目して、思考方法、そしてそれとの関係で、認識や行動にも拡大して、分析することにする。つまり、思考方法にも、喚喩的なパターンと提喩的なパターンが見られ、そのような喚喩的思考と提喩的思考に影響されて、認識の仕方にも、行動の仕方にも、同様のパターンが見られるのであるが、言語表現ほどには意識されず、むしろ無意識的に行っていると言え、その点を分析するのが今回の目的である。

2　隠喩、喚喩、提喩の分類基準

多数の種類に細分化された比喩の内、代表的で、主要な比喩が隠喩、喚喩、提喩の3つであるとされ、研究もそれら3つに集中して行われている(1)。しかも、それら3つの内でも、隠喩のみを認める研究者（サールなど）(2)、提喩のみを認める研究者（グループ・ミュー）(3)、隠喩と喚喩のみを認める研究者（レイコフなど）(4)、隠喩と喚喩と提喩の3つ全てを認める研究者（従来の考え方で、現在でも広く受け入れられている。また、佐藤信夫や瀬戸賢一など(5)も3つを堅持する）など、様々な主張がなされ、最終的な決着には至っていないのが現状で、ただ困ったことには、それらが現在混在した形で存続しており、一般の人には混乱の原因にもなっていることである。

今回は、言語表現としての比喩の分析が目的ではないので、その点に関しては、深い入りせずに、隠喩、喚喩、提喩の分類基準を示し、それよって3つの特徴を明確にすることだけで終えることにする。一応、上記の内、従来からの分類を従来型とし、レイコフなどを欧米型とし、佐藤信夫、瀬戸賢一などを日本型として、ここでは区別することにする。世界的に広く、根強く受け入れられているのが従来型で、その意味では、分類の基本型を成すものであり、最近欧米や日本で人気があり、大きな影響力を持ってきているのが欧米型で、レイコフなどの影響力の強さによるものであり、最後に、日本以外での影響は余り感じないが、日本ではかなり支持されているのが日本型であると言える。

従来型、日本型、欧米型の3つは、それぞれが異なる分類基準を用いて、比喩を分類している。比喩には、あるものを別のものでたとえる為に、2つのものが必要で、それら2つのものがどのように関わっているかによって、捉え方が異なり、分類方法も異なってくる。

最初に、従来型では、2つのものの関係の仕方を基準にして分類している。類似する関係、隣

接する関係、全体と部分の関係の３通りの関係の仕方によって、類似関係が隠喩であり、隣接関係が喚喩であり、全体と部分の関係が提喩であるという具合に、３種類に区別される。次に、日本型では[6]、グループ・ミューの主張を受け入れて、全体と部分の関係を包含関係と包摂関係に分けて、類似関係、隣接関係、包含関係、包摂関係の４種類に区別し、その上で、扱う対象の種類（物理的なものか、それとも概念的なものか）を基準にして、類似関係（物理的・概念的なものの両者を対象）が隠喩であり、隣接関係と包含関係（共に物理的なものを対象）が喚喩であり、包摂関係（概念的なものを対象）が提喩であるとしている。最後に、欧米型では、２つのものが所属する領域の数を基準にして分類しており、全く異質の２つの領域に所属する２つのものの間の類似性が隠喩であり、１つの同一の領域内での２つのものの隣接性が喚喩となり、提喩は同一領域内の隣接性の特殊事例にされる。２領域間か、同一領域内かの基準で分類される為、提喩の存在意義は否定され、隠喩と喚喩の２種類しか存在しないことになる。

具体的な説明は省略し、あとで思考方法との関係で、少し詳しく検討することにする。ともかく、関係の仕方、扱う対象の種類、所属する領域数という分類基準によって、提喩の独自性を否定したり、隠喩、喚喩、提喩の３つを認めながらも、その内容は大きく異なってきている。そこで、類似性、隣接性、包含性、包摂性という具合に、区別して話を進めていくことにする。なお、ここでは従来型の提喩＝包含性＋包摂性、日本型の喚喩＝隣接性＋包含性、日本型の提喩＝包摂性のいずれが妥当であるかに関する問題は残したままにし、両者の相違だけを指摘するに止めておく。

3　思考方法

思考方法などにも、喚喩的パターンと提喩的パターンが見られると言ったが、その前に、思考方法全般について少し触れておくことにする。

一般的に言えば、私たちの頭の中で、あるいは意識の中で、認識→思考→判断→行動という過程が繰り返し行われており、その過程の前後に現実世界が存在している。つまり、現実世界で生活している私たちは、最初に現実世界のあるものを対象にして認識するわけで、ここから意識内の活動が開始し、次に認識されたものをどのようなものなのかなどを色々と考え、その上で良いか悪いかなどの価値の判断をし、それでどのような行動を取るかを決めるわけで、その結果、行動を取ることで、現実世界に働きかけ、関わりを持つことになる。勿論、意識過程の中で、各段階の位置づけ、各段階間の影響・規定関係など、様々な問題があるが、ここでは単純化して進めていく。

現実世界と意識の関係で、意識は自立した存在ではなく、環境によって影響・規定されて成立するとするのか、反対に、意識は他からの影響・規定を受けない、それ自体で存在するもので、むしろ環境に影響・規定を与えるとするのか、いずれの立場に立つのか、それとも折衷的な立場に立つのか、様々な問題を抱えているが、その問題には立ち入らず、現実世界と意識が双方向的に影響・規定しあっているのは事実であり、その現実を踏まえて考えていくことにする。なお、影響・規定の意味合いは、弱い、緩やかな関係（loose relation）が影響（affect）で、強い、厳密な関係（strict　relation）が規定（determine）であり、両者とも、何らかの制約（restrict）を受けることになるので、制約として広く扱うこともできる。

そこで、双方向的な関係にある現実世界と思考の間で、まず現実世界から思考への影響・規定の関係では、多くのルートが考えられる。第１に、知覚的な影響・規定がある。私たち人間は日々現実世界から五感を通して多くの情報を取り入れている。事件、事故、自然災害などを体験する

ことで、思考に影響を与えるだけでなく、決定的な方向へと押しやるほどの規定を与えることになり、また何らかの刺激や興味のあるものを体験することで、同様に思考に影響・規定する場合もあり、またそれほど強い刺激でもなく、興味でなくても、繰り返し体験することで、同様の影響・規定を受ける場合もあり、さらにまた１度限りの些細なものでも、時として思考が影響されることもあり得る。知覚的な体験、特にある地点・時点での実体験によって現実世界から私たちの思考は影響・規定を受けていると言える。

第２に、伝達媒体から得る情報によって思考に影響・規定を与えることである。ある地点・時点での生の体験、つまり実体験以外にも、著書、雑誌などの印刷物、テレビ、ラジオ、新聞などのマスコミ、インターネットなどのコンピュータ、講演、授業から個人的な会話までの発話など、多くの伝達媒体を通して日々大量の情報を得ており、それが思考に大きな影響を与えるだけでなく、決定的な方法で規定することになる。例えば、ある本を読んで、考え方が変わり、人生も変わったしまった人もいるでしょうし、テレビなどのマスコミの影響を受けた人も多数いるでしょうし、最近ではインターネットによって得られる情報で、考え方がすっかり変わってしまった人も少なくないでしょう。結局、伝達媒体から得るものは、単に情報だけでなく、思考への影響・規定であり、それだけ危険性も大きくなると言える。

第３に、社会的な影響・規定がある。国内的にも、国際的にも、社会には様々な出来事が毎日起きている。それは、その場に居ることで、実体験を通しても、またテレビ、新聞、インターネットなどの伝達媒体を通しても、経験できるのであるが、それらと異なるのは、ある一定の集団性があることであろう。集団性の例として、まず社会システムが考えられる。社会システムは複合的な組織として、政治的、経済的要素だけでなく、その他の多くの要因によって構成されている。そうした複合的な組織としての社会システムが人々の思考に大きな影響を与え、時には規定するほどの力を持つことがある。具体的には、資本主義的政治体制を有する社会と共産主義的政治体制を有する社会では、あるいは先進国のような経済的成熟に達した社会、新興国のような経済的発展がめざましい社会､そして発展途上国のような経済的発展がまだ進んでいない社会では、さらに貧富の差の大きな国における上層社会と下層社会では、構成メンバーである人々は異なる（時には、相反する）思考を持つことになる。次に、集団性の例として考えられるのが、社会現象、社会的流行、社会的風潮とか言われているものである。そのような集団的傾向は、上記の社会システムとは異なり、政治的、経済的、その他の要素とは関係なく、全ての社会で起こりうるもので、むしろ社会という人間集団の組織自体が持つ特性であり、宿命でもある。具体的には、今年（2011年）の例を取れば、東北大震災の為に、節電が日本中に浸透し、誰もが何に対しても節電という考えで対応し、行動しており、またそれほどの大規模ではないが、芸能界の流行が芸能界の枠を超えて、社会全体に浸透し、社会現象になったとマスコミでよく言われるが、今年は歌手のグループであるAKB48が流行し、社会現象になったと言われている。いずれの場合でも、社会現象という集団的傾向を共有し、人々が同じ思考をすることになり、ある一定の方向に進むことになるが、時には（戦時中など)、危険な状態に追いやることもあり、特にその中でマスコミの果たす役割が非常に大きく、一般論として、社会全体が同一の思考を持ち、同一の方向に進むことの危険性に注意すべきである。

第４に、文化的な影響・規定がある。民族、国家、地域などの文化の適用範囲の規模の大きさによる区別、時代、年齢、性別、その他の様々な文化内容の種類による区別などが考えられる。例えば、日本文化、アメリカ文化などのような国家文化、東京文化、京都文化、沖縄文化などのような地域文化、明治文化、大正文化、昭和文化などのような時代文化など、その他にも、仏教

文化、キリスト教文化などのような宗教文化、衣服や装飾に関する服飾文化、日々の食事に関する食文化など、文化と言っても、細分化すれば、きりがないほどの広がりを持ってくる。そして、個人は所属する場や集団によって多くの文化を持つことになり、むしろ多数の文化の重なり合う接点に個人が存在するということになる[7]。そして、それらの多数の文化によって影響され、また規定されているのが個人ということになる。具体的には、私の場合、日本で生まれ、東京に住み、大学教員として働き、日々食事をし、衣服を着、居酒屋に行き、喫茶店に行き、電車、地下鉄、バスに乗り、その他多くのことを行っているが、それぞれにはそれぞれの文化があり、それぞれのレベルで影響・規定を受けている。そして、レベルにより、影響・規定の仕方も異なってくる。

第５に、個人の特性による思考への影響・規定がある。上記の影響・規定の関係以外にも、個人にしか有さない特性というものがあり、それは一人一人異なり、それが独自の影響・規定を与えることになる。その特性は、DNAのような遺伝的な要素から成り立っている場合もあれば、誕生後の経験によって積み重なってきたものもあり、むしろ遺伝的要素と経験的要素の総体としてあると言える。従って、誰一人として、同一の特性は存在しないことになる。自分にしかない特性を有する個人は、その特性を獲得する過程で、勿論上記の１～４の影響・規定を全て受けると同時に、両親から受け継いだ遺伝子、生まれ育った家庭環境、親戚、友人、同級生、同僚、近所の人などの人間関係などによって特性が形成され、それによって思考への影響・規定が他人とは異なってくる。簡単に言えば、私たち一人一人は、自分にしかない特性を持っており、従って自分にしかない独自の思考を持っており、それによって行動の仕方にも差が出てくる。

以上、１～５まで、思考への影響・規定の関係として、簡単に検討してきた。なお、意識ではなく、思考との関係で見てきたが、もし意識とすれば、認識・思考・判断・行動という過程全般を扱う必要がある為で、外界を五感と通して認識し、それを思考し、そこである一定の思考・思考方法（例えば、今回では、喚喩的思考と提喩的思考）が確立し、それが認識へ、さらに判断、行動へと影響・規定するということを単純化して、その確立される思考を中心に考えて、思考との関係を直接取り上げた次第である。

4　比喩的思考

思考の仕方には多くの方法があり、私たちは意識的にも、無意識的にも、日々使用している。勿論、論理学や数学のように、厳密な法則や方式を使用する場合だけでなく、日常生活においても、何かを選んだり、何かを決めたりする場合にもある思考方法を使用している。従って、ここでは思考や思考方法を特定領域の特殊技能から日常的なありふれた考え方までを含めて使用することにし、演繹的思考方法も帰納的思考方法も共に含めて話すことにする。基本的で、一般的な思考方法に「比較」というものが考えられる。あるものをそれ自体で見ていても、何であるかを理解するのは困難な場合があるが、それと関連するものを比較することで、何であるのかが見てくる場合がある。例えば、ある論文を読む時、その論文だけを読んでいても、内容的にはっきりしなかったり、理解できなかったりするが、その論文と関連のある別の論文（特に、批判の論文がより効果的であろう）を読んで比較することで、何が問題点で、何が欠落しているのかなどが鮮明になり、内容の理解度が増すことがある。また、日常生活でも同様のことはある。例えば、マーケットでトマトを買う時、１軒の店だけを見ていては、トマトの評価はできず、買うことが適切なのかもわからないが、何軒か店を見て比較することで、価格、品質、数量、栽培方法（農薬や化学肥料の使用の有無など）などを比べて、どこの店のトマトを買うのが最適なのかがわか

る。そのような比較は、関連するものが同時点のものだけでなく、過去のものでもよく、従って過去の経験、書物、マスコミなどで得た知識などの過去の情報でもよく、上記の論文やトマトについても、過去の情報との比較で判断することができる。そのように考えると、例えば、ある分野の専門家がその専門領域に関する論文を読んだだけで、すぐに詳しい内容が分析でき、評価できるのは、比較をしていないわけではなく（たとえ、同時点で、関連する他の論文を読んでいなくても）、過去の情報との比較を行っているのであって、比較という思考方法は使用されていることになる。つまり、過去の情報（過去に得た経験、知識、技術など）が多ければ多いほど、それとの比較で、あるものをそれだけ見ても、瞬時に理解できることになる。

比喩的思考方法は、比較という思考方法の一種で、１対多ではないが、１対１の関係で、２つのものの比較を土台にしている。そして、その中には、代表的な比喩である隠喩、喚喩、提喩に対応して、隠喩的思考方法、喚喩的思考方法、提喩的思考方法がある。それ以外の比喩（例えば、アイロニー、誇張法など）には、それぞれに対応する独自の思考方法が存在する。そして、勿論比喩以外にも、比較の中には、様々な思考方法が存在することになる。なお、今回のテーマである喚喩的思考と提喩的思考に入る前に、隠喩的思考についても、少し触れておくことにする。

比喩の中でも、古代ギリシャ時代からその中心を成してきたのが隠喩であり、現在でもその地位は変わらず、むしろ比喩＝隠喩とされる時があるほど、隠喩が最重要化されている。従って、隠喩的思考にもそれなりの意味合いがあるはずである。隠喩的思考は、その特性あるいは機能として、類似性があることから考えると、類似性こそが人間の思考にとって基本的なものであるということになろう。

類似性による比較とは、一体何か。意識的か、無意識的かは別にして、私たちは毎日ごく当たり前のように似ているかどうか、同じかどうかを認識し、判断しているのであり、例えば、視覚的には、あの人はこの間会った人じゃないかとか、聴覚的には、あの歌は前に聴いた歌じゃないかとか、味覚的には、この味は前に行った店の味と同じじゃないかとか、嗅覚的には、この香水の匂いは前に嗅いだ匂いと似ているじゃないかとか、触覚的には、この服の肌触りは去年買った服と大体同じじゃないかとか、五感を通して、類似性（ここでは、同一性も一緒に入れて、考えている）による比較を行っていることは明らかである。つまり、五感による類似性という点が、五感が人間の意識の開始点であることから、基本的であると言えることになろう。

さらに、上記の例でも明らかのように、過去の情報との比較という点を延長させることで、人間の意識の原点と言えるものに辿り着くことになる。比較には、同時点での２つのものの比較もあれば、過去の情報との比較もあり、特に後者をさらに突き進めて考えると原点に到達できる。人間が誕生してすぐの時（あるいは、妊娠中もお腹の中で）、赤ちゃんは母親を見たり、声を聞いたり、体に触れたりしているが、それを繰り返すことで、五感を通して、前の母親と今の母親が同じかどうか確認し、それを繰り返すことで、母親を間違いなく認識し、母親であると判断するのであり、同様のことは父親、兄弟、祖父母、親戚、友人などにも行われていき、究極的には、赤ちゃんは自分を守ってくれる人（愛してくれる人、優しい人、世話してくれる人など）とそうでない人（冷たい人、害を与える人、危険な人など）を識別し、味方か敵かを見分けて、自己保存という本能的な自衛という行為を行っていると考えることができる。もしそうであれば、類似性による思考方法は、むしろ本能的なものであり、まさに人間の意識の原点になるものであると言える。つまり、類似性による思考方法は、人間の意識の開始点であり、原点であり、従って基本となるものである。

隠喩に関しては、言語表現として見るか、それとも思考方法として見るかによって、矛盾が生

じてくる。レイコフなどの欧米型では、類似性と異質の２領域間の関係という２つの基準で判断されるが、隠喩的思考方法では、上記のように、類似性という基準で説明してきた。そのような差をどう処理すべきであろうか。従来型に戻って、類似性だけを基準にするのか、隠喩的思考方法に異質の２領域間の関係を追加するのか、どのような方向に進めるべきであろうか。

例を挙げながら話を進めていくことにする。例えば、親子、兄弟姉妹など、あるいは双子のように、いくら似ていても、同一領域内の関係の為、レイコフに従えば、隠喩として使用できないことになるが、赤の他人が誰かに似ているという現実は明らかで、顔や声が似ているケースはよく見られるものであり、そのような他人の場合は、隠喩として使用できるのであろうか。「A君は加山雄三だ。」のように、映画や音楽のスターなどの有名人にたとえて、その類似性を示すことは勿論可能であり、好きなタイプや結婚したいタイプを聞かれた時、多くの人は有名人にたとえるように、隠喩として使用できるし、現実に使用している。そこで、双子であれば、隠喩ではなく、他人であれば、隠喩となるわけで、どう説明すべきなのか。よく使用される例として、「君はバラだ。」という隠喩があり、人間の女性の美しさと植物のバラの美しさの類似性によって使用されており、人間という領域と植物という領域は、全く異質の２つの領域であると区別できる。では、双子と他人の場合は、どうか。両者とも、人間という領域内のことで、その意味では、同一の処理がされるべきであるが、そうではない。そこで、人間という領域を細分化する必要が出てくることになり、例えば、遺伝子の継承のように、遺伝的要素を加えるとしても、親子から遠い親戚まで、あるいは遠い祖先まで広がることになり、第何親等までにすべきかが議論されなければならなくなり、結局人間の領域という大雑把な分類では可能であったものが、細分化することで混乱と矛盾が生じることになってしまう。

少し考え方を変えて、隠喩を類似性という基準１つで処理し、さらに双子も、他人も同様に隠喩として使用できるとしよう。問題は、近い血縁関係の場合、本当に隠喩として使用できないのかということである。例えば、双子の兄弟の太郎と次郎がいるとして、母親が「次郎は太郎だね。」と言って、叱るとする。次郎のだらしない性格が太郎のだらしない性格と類似していることで、隠喩として使用することはできるであろう。もしそうであれば、レイコフの言う異質の２領域間の関係という基準は必要ないことになり、単純に従来型の類似性という基準１つでいいことになろう。

思考方法として見ても、類似性の上に、さらに異質の２領域間の関係という基準を追加することは、単なる基準の追加というよりは、別の思考方法の追加と言えるものであろう。つまり、類似性による本来の隠喩的思考方法に、それとは別の思考方法が追加されるわけで、隠喩的思考方法の中に追加されるのではなく、外に異質の思考方法が加えられるということになろう。その意味で、類似性による隠喩的思考方法がまずあり、そこに別の異質の思考方法が加えられるわけで、切り離して考えるべきであり、また言語表現としての隠喩では、類似性と異質の２領域間の関係という２つの基準で分類するとすることも可能であろうが、上記のように、もし双子も他人も共に隠喩として使用できるのであれば、思考方法としてだけでなく、言語表現としても、類似性という基準１つで十分足りていることになろう。

なお、隠喩的思考あるいは隠喩的思考方法という表現は、おかしなものであろう。人間の意識の根本である比較という思考方法、そしてその中にある差異性、類似性、同一性（厳密に同一であるかどうかの判断は難しく、多くの場合は、類似性の中で処理できるので、今回は同一性を単独で検討しなかった）というそれぞれの思考方法があるわけで、隠喩以前の問題であり、人間の意識の本来的な思考方法であり、それに「隠喩的」という表現を付けるのはおかしく、従って隠

喩的思考とか、隠喩的思考方法とか、あえて言う必要はないであろう。

5　喚喩的思考と提喩的思考

類似性による思考方法は、五感を通して行われ、感性的で、直感的であり、しかも人間の自己保存という自衛に基づくもので、本能的であることを説明してきた。では、隣接性、包含性、包摂性という基準では、どのような思考方法の特徴が現れるのであろうか。

まず、隣接性について、考えてみる。隣接する関係は、勿論空間的に存在する２つの物理的なものの関係に関するものであるが、時間的に起きた２つの出来事の関係としても捉えることができる。つまり、空間的隣接性と時間的隣接性として隣接性を広く捉えることができるし、むしろ合理性があると言える。そこで、空間的に存在する２つの物理的なものが単に隣接しているというだけでは不十分であり、また時間的にも先行する出来事が後続する出来事と隣接するというだけでも不十分である。単に空間的・時間的に２つのものが隣接するということでは、喚喩としては使用できない。それは、空間的・時間的に隣接するものは複数存在するが、その中から２つを選び出す必要があるからである。複数あるものの中から無差別に選び出しても、その無差別の選択が全て喚喩になるというわけではない。そこには、あるつながりがなければならない。そのつながりに従って、２つのものを選択することになる。

例えば、「鍋が煮えた。」によって鍋の中の具が煮えたことを意味する場合、日本の冬の鍋料理という条件がまずあって、そこから鍋、中身の具、ガス・電気、調味料、箸、皿などの多くの必要なものがあり、それら全てが構成要素になって、鍋料理という全体を形成するわけで、必要なものは全て空間的には隣接した関係に存在することになる。それら必要なものの中から、無差別に２つを選択すればいいと言うものではない。「……煮えた。」と言う以上、煮るに関係するものを選択し、それからガス・電気は煮る為の手段であって、その手段自体が煮えることはないので、最終的に鍋と具が選択され、「鍋が煮えた。」が「具が煮えた。」を意味することができることになり、「食べましょう。」を暗に言うことになる[8]。以上のように、日本の冬の鍋料理、煮るという行為、煮られる対象という具合に、いくつかの条件を揃えながら、ある一定のつながりが浮かび上がってくる。勿論、一般的に行われているように、容器と中身の関係として分類することはできる。しかし、なぜ鍋であって、他のものではいけないのかが明確ではなく、それを明らかにする為には、ある一定の条件、ある一定のつながりを考慮することが必要になってくる。

隣接性は、単に空間的・時間的に隣接する関係しか意味せず、ある特定の２つのものが隣接するとするには、ある一定のつながりが存在するという連結性が必要になってくる。しかし、現実的には隣接性が曖昧に使われ、隣接性＝隣接性＋連結性として使用さている。そこで、隣接性と連結性を区別して考えてみると、例えば、空間的に存在する多数のものを五感を通して知覚することはできるが、それは空間的な位置、空間的な距離などで、単に多数のものがバラバラに存在し、それらが隣接しているかどうかを認識するだけである。そのような隣接性は、五感を通して得られるという意味では、感性的であり、直感的である。しかし、単に多数のものがバラバラに存在しているだけでは、ある特定の２つのものが隣接しているという関係はわからず、そのつながりを知る為には、頭の中で様々な情報を使って、そのつながりを探し出す必要がある。そのような連結性は、感性的でもなく、直感的でもなく、むしろ頭の中で情報などを使用して処理する理性的なものである。さらに、連結性は、人間が本来的に持っている自己保存という本能的なものではなく、むしろ自己をより良くする為のもので、自己改善という理性的な欲求であると言える。従って、連結性は、理性的で、自己改善という理性的欲求であるという点で、類似性とは異

質なものであり、また一般的に捉えられているように、隣接性＝隣接性＋連結性であるとすると、隣接性による思考方法は、類似性による思考方法とは異質なものであると言える。

包含性は、どうであろうか。物理的なものの全体・部分関係は、五感を通して、例えば、視覚的に見ることができ、それにより全体と部分の関係を見分けることができよう。そして、隣接性とは異なり、様々なものがバラバラに存在し、それらのつながりが見えないのではなく、全体を構成する部分として、構成要素の役割を成しているので、それらのつながりは視覚的にも見えてくる。しかし、よく考えてみると、構成要素としての部分は複数あるわけで、その中のどの部分と全体がつながっているかは五感的にはわからないし、また何らかの理由で、全体が見えず、ただ部分しか見えない時も、五感的にはつながりがわからず、推測するにすぎない(もしかしたら、部分から全く別のものを推測したり、あるいは部分しかなく、全体が存在しない可能性もあろう)のであり、やはり隣接性と同様に、連結性という理性的な処理が必要になる。

少し例を挙げて説明することにする[9]。「メガネを拭く」、「ロウソクを消す」、「車を掃除する」などのように、メガネ全体ではなく、ガラス部分を拭くのであろうし、ロウソク全体を消すのではなく、その一部である火を消すのであろうし、車全体ではなく、車内の室内を掃除するのであろうし、全体と部分の関係は、構成要素という関係で、つながりはかなりはっきりしているが、例えば、車の場合、車を洗うのであれば、外側であろうし、掃除するのであれば、車内の室内(機械部分、電気系統部分、その他の部分ではないであろう）であろうし、修理するのであれば、エンジンなどの機械部分、電気系統部分などであろうし、全体と部分のつながりは直感的にも、五感的にもわからず、車を洗う、掃除する、修理するという行為が一般的にどのような意味合いを持っているかを知っている必要があり、理性的な処理を必要とするものである。また、人間の身体について考えると、頭数で人数を意味したり、新しい血が必要とか、新しいブレーン（頭脳）が必要とかで新しい人材を必要としていることを意味したり、手、顔、頭を貸したりするが、身体の全ての部分が喚喩として使用されるわけではなく、文化的な背景なども必要情報となっていることを示している。

包摂性は、どうであろうか。概念的なものの全体と部分の関係は、五感を通して得られるものではなく、最初から頭の中で処理される理性的なものである。それだけに、類概念（より広い範囲をカバーする概念）と種概念（より狭い範囲をカバーする概念）という種類の関係は明確であり、全体と部分のつながりもはっきりしていると思われるかもしれないが、例えば、「花見に出かけた」と言って、桜を指したりする時、なぜ花が桜でなければならないのかは明確ではなく、花見という日本的な文化的背景に関する情報が必要であり、従って連結性という理性的処理が必要になってくる。

ここで興味深い例を１つ挙げることにする。例えば、「山田太郎」という名前の英語の頭文字を使って、「TY」と呼ぶ時、全体と部分の関係が成立する。文字が物理的なものなのか、それとも概念的なものなのか、つまり文字は書いたり、見たり、聞いたりできるので物理的であるとか、文字は抽象的な伝達手段として作り出されたもので概念的であるとか、それぞれの可能性を示すことはできるであろう。いずれかは別にして、物理的なものとして捉えるならば、山田太郎(Taro Yamada）という名前が全体で、頭文字 TY は部分になり、包含関係が成り立つが、もし概念的なものとして捉えるならば、逆転して、頭文字 TY が全体（類概念）で、山田太郎は部分（種概念）になってしまう。それは、TY が類概念であって、その中には、山田太郎もいれば、矢口泰一（Taiichi Yaguchi）もいれば、山川恒夫（Tstuneo Yamakawa）もいれば、頭文字が TY になる名前全てが種概念として入っているからである。そこに、包含性と包摂性の特性の相違が見えて

くる。前者では、空間的な広がりによって、この場合であれば、Taro　Yamadaの10文字からTYの２文字に減少するように、文字数の量によって示されるが、後者では、文字数の多い・少ないではなく、それらの文字が表す概念の種類によって、つまり類であるか、種であるかの概念的・観念的な広がりによって示される。

次に、図形的な思考を考えてみる。隣接するという時、遠接（○　　○）、近接（○　○）、接触（○○）、重複（○○）、全体・部分（◎）に分類することができよう。隣接性は、単なる空間的・時間的位置、空間的・時間的距離だけを基準にしているわけではなく、２つのもののつながりという連結性も基準になっているので、必ずしも位置的に隣であったり、距離的に近くにある必要はなく、何らかのつながりがあれば、遠くても隣接性（勿論、この場合は、＋連結性という意味合いである）とすることができる。そう捉えれば、遠接、近接、接触、重複、全体・部分が全て隣接とすることができる。ただ、距離的な遠さ・近さ（厳密には、接触の場合は、距離的には０であるし、重複などはマイナスになろう）による相違はあるが、特に顕著な相違が位置関係で、全体・部分だけが内側での隣接関係で、あとは外側での隣接関係になっている。その相違を踏まえて、全体・部分の関係だけを切り離して、それ以外の関係を隣接関係とする考え方は一般的である。なお、図形的には、包含関係も、包摂関係も、共に全体・部分の関係であり、その点で、包含関係と包摂関係を１つにして、全体・部分の関係として提喩とするのが伝統的である。ただ、位置関係が外側であれ、内側であれ、隣接している関係であることには違いはなく、その共通項は明確にされるべきであり、その意味で、まず隣接性という共通項があって、その上で内側の隣接性と外側の隣接性に区別すべきであろうし、必要であれば、その上に距離関係で遠・近・ゼロ・マイナスと区別することはできよう。ともかく、内的隣接性と外的隣接性の相違は大きく、私たちの思考にも影響を与えることになる。円の内側であれば、多数のものが入っていても、無秩序に、無意味に、ただバラバラに存在しているとは考えず、円の内側で、それぞれ１つ１つが何らかの関係を持ってそこにあり、円という全体を構成する各要素として存在し、必要不可欠なものであるとも考えてしまうであろう。しかし、円の外側では、空間的にも無限に広がっているように感じられ、その無限の空間には無数のものが存在していると思ってしまう。そこでは、無数にあるものがバラバラな状態で存在し、関係のある・なしに関係なく、無秩序に、偶然的に、混在しているように見え、従って位置関係と距離関係を基準にして、傍の周辺を見ることになり、空間的・時間的に隣接する（位置関係と距離関係のみ）という点だけで判断する傾向が出てくる。そのように捉えると、隣接性は、非常に大きな広がりの中で、２つのものの関係を見出すことになり、分類も細分化され、それらの種類も量的には非常に大きなものになっているのに対して、全体・部分は、ある一定の固まりを扱い、しかも全体の構成要素という関係で部分がある為、それ自体でつながりを明確にしている以上、その上に連結性は必要ないと思われるであろうが、やはりそこにも隣接性と同様に、連結性が必要になってくるのである。

図形的に思考すると、隣接性を内的隣接性と外的隣接性に区別する必要があるように感じられるが、その相違について、さらにどのように説明したらいいのであろうか。１つに、視覚的な視野があろう。ある１点に立って、そこから無限に広がる世界を見ると、開放的になるし、外向的で、拡散的になるのに対して、ある一定の制限を付けられた枠（上記の円など）内に立って、その枠内だけを見ると、当然閉鎖的になるし、内向的で、集中的になる。そのような無制約性と制約性という特徴は、思考方法にも当てはまるものである。例えば、制約性（内的隣接性）による思考方法の結果として生まれる提喩（包摂性）を見ると、花見ー桜、おめでたー妊娠、尾頭付きー鯛、焼き鳥ー鶏、親子丼ー鶏と卵（親子と言っても、サケーイクラは親子丼にはならない）、

飲む・打つ・買う－酒・博打・女性という具合に[10]、日本文化という文化的制約を受けており、そこに文化限定性という特徴が見られる。従って、日本文化以外のところでは、例えば、花見と言っても、桜以外の色々な花を見ることになるであろうし、おめでたと言っても、妊娠以外にもおめでたいことは沢山あるし、尾頭付きと言っても、魚なら全て尾頭が付いているという具合に、上記の例のような１対１の強い連結力はない。ただし、そのような強い連結力は包摂性において特に見られる現象であって、包含性ではそれほどの強さは現れない。例えば、包含性の場合、「月曜日１時限の言語哲学を教えている村越先生」を前提にして、「月曜日１時限は休講です。」、「言語哲学は休講です。」、「村越先生は休講です。」が可能であるが、どれを言うかは、話し手が何を顕著な特徴として取り上げ、強調したいかによって決まってくるわけで、そこには大学講義休講連絡という全体の枠が設定され（開講曜日・時限、講義名、担当者名、履修登録番号などで連絡する）、その枠内で実行されるという制約性はあるが、その中での自由な選択の幅は出てくることになる。そのように考えると、内的隣接性だけでなく、扱う対象を概念的なもの（包摂性）にするのか、物理的なもの（包含性）にするのかによっても決定されることになる。

さらに、意識過程を考えてみる。意識過程は、現実との接点である認識から開始し、認識－思考－判断－行動という過程を通り過ぎて、最後の行動で再び現実との接点を持つ。従って、意識過程は、現実世界に生きている人間が現実の中で持つことのできる自分の世界であり、現実世界という外的世界から区別される別世界の内的世界である。なお、前述したように、認識を通して影響・規定された思考が独自の方法を確立し、その思考方法が認識へと、また判断、そして行動へと影響・規定するという関係だけを今回は取り上げることにし、単純化する為に、それ以外の可能性については今回は取り上げないことにする。

意識過程あるいは意識世界の重要性は、全てのものが一旦意識の中に取り入れられ、それらの全てのものが意識の中の情報となり、意識の中でそれらの情報を処理することになるという点である。例外なく、全てのものが意識を通して得られ、それ以外のルートはあり得ないことであり、従って全てが意識を通して得られる情報なだけに、「意識を通す」ということで、ある種のフィルター（時には、色眼鏡とか、別の言い方もある）にかけられることになる。これが人間にとっての宿命であり、これしか今のところ方法はないのである。では、意識世界において、全ての情報はどのように見えてくるのであろうか。かなり前になるが、欧米では知覚（perception）に関する議論が盛んで、その時に意識に映し出されるイメージについて検討された（sense-date の取り扱いに関する検討）[11]。例えば、真っ直ぐな棒を水の中に入れて、曲がった棒に見える場合のイメージと実際に曲がった棒を見る場合のイメージは、視覚という感覚を通して、意識の中に取り入れられたデータ（sense-data）であり、意識の中の情報である。問題は、これら２つの情報が同一の場合、つまり水の中で曲がって見える棒のイメージと実際に曲がっている棒のイメージが同一の場合、どのように区別できるのかということであり、さらに錯覚・幻覚（illusion，delusion，hallucination の３種類は、本来内容的にも、質的にも異なるものである）が加わり、視覚的な錯覚、夢で見る幻覚、酒による幻覚、薬物による幻覚などで見る棒の情報が実際の棒の情報と同一の場合、どうするのかということである。言い換えれば、現実世界では、実際に曲がった棒、水の中で曲がって見える棒、トリックやマジックによって曲がって見える棒、夢の中で曲がって見える棒、熱にうなされて曲がって見える棒、酒で酔っぱらって曲がって見える棒、麻薬などの幻覚作用で曲がって見える棒など、様々な現象が考えられるが、意識世界では、それら全てのイメージが同一であり、情報として同一である場合、私たちはどのように見分けることができるのであろうか。

果たして、１つ１つの相違を見分け、指摘し、説明できるのであろうか。または、逆に、意識世界における同一のイメージ、同一の情報の方が重要で、そこを軸に全てを展開すべきではなかろうか。ここでは、客観的妥当性について議論するつもりはなく、ただ意識世界では、現実世界における多くの異質の現象が同一の情報として扱えるということを取り上げていくことにする。

知覚の例から理解できるように、現実世界における実在物から非実在物まで、神話、おとぎ話、小説、マンガ、映画・テレビなどの架空のものまで、想像・空想のものまで、夢まで、ありとあらゆるものが意識の情報として同一次元で扱われる。それだけでなく、ニュースなどから得られる社会情勢や世界情勢、書物などを通して得られる知識などもある。つまり、意識世界では、感性的なものから理性的なものまで、また知覚時点から過去のものまでが全て同一次元で扱われる。そのような意識世界では、出所がどこであれ、いつであれ、全てのものが取り入れられ、意識の情報として同一次元で扱われる傾向があり、しかも悪いことには、客観的な根拠や事実関係に関係なく、そのような情報を自由勝手に組み合わせたりして、展開できることである。出所から切り離された情報として、全くあり得ないものが意識の中で作り上げられたりするが、自由な発想や創造ができるという意味では、評価できるであろうが、事実関係から遊離したり、否定したりすることで、現実離れ、現実無視、現実否定へとつながるという意味では、批判されるべきであろう。いずれにせよ、思いも寄らない情報の組み合わせや展開が可能になるだけに、人々には想像できないような発明や発見を可能にする一方で、単なる狂人と思われてしまうこともあるであろう。

そのような意識世界の特性は、あくまでもそのような傾向があるということであって、それを全面的に肯定することもできないであろうし、そこで出所を明確にすることで、客観的な根拠や事実関係に基づくようにする必要が出てくるであろう。それは、意識世界と現実の最初の接点であり、意識過程の開始点である認識、つまり現実世界の認識に重きを置く必要性ということになろう。知覚の例が示すように、大きな問題を抱えているとは言え、やはり現実の客観的で、正確な認識を追求していくことが重要となろう。但し、実際には私たちは全ての意識の情報を同一次元で対応し、処理する傾向があることには変わりないのであって、その意味で、先の日本型で取り上げた対象の相違である物理的なものと概念的なものの区別は、意識世界では明確に出てこず、むしろ出所を意識することで明確になってくるようなものである。もしそのように考えると、包含性と包摂性の区別は、少なくとも意識世界ではそれほど明確なものとして存在しないであろうし、もしそうであれば、感性的で、感覚的な認識に訴えかける図形の方がより鮮明になり、その意味では、包含性と包摂性を区別しない全体・部分という図形的な思考方法の方が理解しやすく、むしろ従来型の方が日本型よりも説得力があるとも言えよう。勿論、言語表現としての比喩と思考方法としての比喩は異なるもので、思考方法としては従来型の方がより説得力があると言っても、言語表現としては日本型の方が説得力があると言うことはできる。

全ての情報を同一次元で対応し、処理する意識世界では、五感を通して得られる感性的な感覚データという情報が中心になり、そこに理性的なルートから得られる情報、過去の経験や知識から得られる情報などが加えられ、さらにそこに既存の情報を出所に関係なく組み合わせて、展開した情報が加えられるという具合に、同一次元での対応、処理と言っても、何らかの仕分けが必要になろう。そのような仕分けを取り入れるならば、第１グループにおける感性的なルートから得られる情報に対する人間の依存性は高くなり（例えば、感性的に得られた情報の方が信じやすく、受け入れやすく、好感を持ちやすいなどがあろう）、従って図形などの感覚に訴えかけるようなものが優位になり、思考方法としては、隣接性と全体・部分性の２つか、それとも単に図形

的に見るだけならば、内側か、外側かの位置関係はそれほど重きが置かれず、隣接性１つということになろう。瀬戸氏の言う包含性と包摂性の区別も、先のレイコフの言う隠喩における２領域間の区別も、共に第２グループの理性的なルートを通して得られる情報であって、第１グループに重きを置く限り、対象外として外されることになろう。結局、図形的に見れば、隣接性と全体・部分性の２つか、隣接性１つかになる。但し、認識を通して得られる情報について、感性的ルートと理性的ルートの両ルートからの情報が考慮されるべきであると考えるならば、瀬戸氏の区別も、レイコフの区別も、重要性が増すことは確かであるが。

以上のように、思考方法について、第１では、直感的・感性的－理性的の特徴の対比を行い、隣接性、包含性、包摂性の３つを区別し、第２では、図形的な思考として、隣接性と全体・部分性の２つを区別し、第３では、意識の情報としての同一次元での対応・処理に関連して、図形的な思考と同様に、隣接性と全体・部分性の２つに区別するか、隣接性１つにするかであった。喚喩的思考と提喩的思考を考える時、言語表現としては、従来型の隣接性と全体・部分性の２つ、日本型の隣接性（＋包含性）と包摂性の２つ、欧米型の隣接性の１つという具合に分類できたが、思考方法としては、枠の内側と外側に差別を付けないのであれば、隣接性による思考方法だけで十分であり、内と外に区別するのであれば、隣接性による思考方法と全体・部分性による思考方法になり、さらにそこに理性的なルートから得られる情報に重きを置くのであれば、隣接性による思考方法と包含性による思考方法と包摂性による思考方法の３つになる。幾つにするかは別にして、隠喩的思考のように、人間本来の直感的で、感性的で、本能的な自己保存という特性の為、「隠喩的思考」という表現自体が適切でないのとは異なり、喚喩的思考にしても、提喩的思考にしても、理性的で、自己改善的な特性を持っており、本能的な人間本来の思考というよりは、それとは区別される特殊な思考方法として扱うべきものである。

6　行動様式

何らかの形で確立された思考方法は、意識世界において、認識、判断、そして行動へと影響・規定を与える。そして、喚喩や提喩などの比喩の言語表現も、そのような行動が実際に行われるものとして、より具体的には、意識世界の行動（頭の中で想定される行動）が現実世界の行動（実際に行われる行動）へと実行されるものとして位置づけることができる。つまり、意識世界において、思考方法によって影響・規定された行動が、実際に口から発話されることで言語表現としての比喩となり、それ以外では、非言語的手段による行動になる。言い換えれば、現実世界で結果として現れる行動は、言語的行動（一般的には、言語行為（speech acts）[12]と呼ばれる）と非言語的行動に区別できる。もしそう考えるならば、比喩を単なる比喩ではなく、意識過程の結果として現実世界で実行される行動の１つとして捉えることで、新たな視点が生まれてくるであろう。なお、今回は非言語的行動に焦点を合わせながら、話を進めていく。そのことで、実際に行動を実行する場合、言語的手段と非言語的手段とでは、どのような様子になるかが理解できるようになろう。ここでも、前述の従来型、日本型、欧米型の基準の相違から生まれる混乱を避ける意味で、喚喩や提喩という表現ではなく、隣接性、包含性、包摂性という表現をなるべく使用することにする。

言語表現としての喚喩・提喩は、表面的には省略という形を取っているが、単に語数を減少させることが本来の目的ではなく、あくまでも話し手の意図をより鮮明に、より効果的に、より説得力のあるものにする為であって、その意味では、その本来の目的が損なわれるのであれば、省略形を使用すべきではないことになる。簡単に言えば、省略することで、コミュニケーションを

円滑にすることが目的である。

非言語的な手段を使用する場合も、同様のことが言える。１つの例として、映画、テレビ、ビデオなどのドラマがある。場面を描写する時、全てを細部に渡るまで１つ１つ克明に描いていたら（現実的には不可能であるが、そこに目標を設定してしまうと、不可能であっても、より近づけようとするであろう）、視聴者はドラマの流れについていけず、焦点が定まらず、全体的にはぼやけたものになってしまい、印象の薄い、インパクトのないものになってしまう。むしろ、省略することで、つまり詳細に描きすぎないことで、焦点を合わせることができ、しかも視聴者の想像力をかき立て、印象の強いものにすることができる。例えば、殺人の場面について、殺人という実際の行為を直接映し出さなくても、床に落ちた、血の付いたナイフを見せることで、視聴者に殺人を連想させることができる。つまり、ある出来事そのものの本体を示さなくても、その出来事につながりのある、時間的に前と後に位置するもの、またはその出来事の関わりのある周辺部分のものを示すことで、その出来事本体を連想させることはできるし、ドラマ以外でも、日常的な活動において見られるものである。そして、その意味は、連想という形で相手を参加させることで、相手の関わりを強め、印象の強い、インパクトのあるものにすることができることである。連想とは、省略部分を埋めて補足する行為であり、省略と補足によって当事者同士（省略を行う側と補足を行う側）を結びつけ、関係を形成させ、コミュニケーションを円滑にさせる作用があると言える。

省略と補足は、隣接性、包含性、包摂性の全てで見られる現象であるが、隣接性は、特に当事者個人の意図によって操作できる部分が大きい。上記の殺人のケースは、隣接性の例であるが、撮影する監督者あるいはドラマを書いた原作者が個人的な意図として、殺人行為に時間的に後続するもの（血の付いたナイフ）ではなく、殺人行為に時間的に先行するもの（おびえた顔、背後から迫る影、口論など）あるいは殺人行為と同時に起きる周辺部分的なもの（ナイフを刺した時の音、悲鳴、うめきなど）を示すことで、視聴者に殺人行為を連想させることができる。そこには、監督者あるいは原作者が自らの意図として、殺人につながりのあるものの中から自由に選択し、何を伝達したいかのメッセージを強調することができる可能性がある。

隣接性による思考方法は、包含性や包摂性とは異なり、ある一定の枠内という縛りがなく、枠外に居て、無数のものが個々バラバラに存在している広がりの中で、何らかのつながりを付けて、その中で２つのものの隣接性を求めていくわけで、しかもつながりそのものが固定的というよりは、かなり自由に設定できるので、２つのものの隣接性の追求はさらに自由なものになろう。例えば、出来事の先行と後続と周辺部分の中身について、上記に示した具体例でなければならないという必然性はなく、使い古されたものよりは、今までドラマで見たことのないようなものを使用することができるのであって、それによって斬新さや興奮を引き出すことができよう。殺人行為というつながりは、無数のものが可能であり、固定観念的にこれでなければならないという縛りはなく、それだけに殺人行為に関わりのあるものを自由な発想で選び出し、それを映像で映し出すことができるし、その方が創造的でいいであろう。

ドラマなどでは、省略と補足という関係が可能であったが、カメラやビデオカメラで静止画や動画を撮る場合、実際に目を通して見る場合などは、どうであろうか。レンズに入る全てのものは映像に映し出され、私たちの視界に入る全てのものは網膜に映し出されるわけで、その点から言うと、省略はないことになる。しかし、撮影者がレンズに入る全てのものを見ているのではなく、あるものに焦点を合わせて、撮影しているのであり、その映像を見る人も映像に映し出される全てを隅から隅まで見ているのではなく、あるものに焦点を合わせて見ているのであり、また

私たちも視界に入る全てのものを意識しているのではなく、あるものに焦点を合わせ、それ以外のものは意識の外になる。つまり、レンズや目を通して入るものは全て映像や網膜に映し出されるが、人間の意識はその全てを対象にしているのではなく、焦点を合わせて意識する部分（意識内）と焦点を合わせず、ぼんやりとした部分（意識外）が存在し、結局意識内のみが対象になって、意識外は欠落することになる。この欠落が省略に対応するであろうし、そうであれば欠落に対する補足も可能になろう。但し、両者には相違がある。映像や網膜に全てが映し出されていながらも、意識外で欠落するケースに対して、ドラマのテレビ映像のように、初めから省略されて、映像には映し出されないケースであり、その相違が補足の仕方にも違いを生み出す。欠落への補足は、意識外から意識内へと移行させることであり、単純に言えば、意識することであり、それに対して、省略への補足は、元々何もないところに何かを埋めて塞ぐことである。さらに、別の相違を生み出す。省略と補足の場合は、何もないところに何かを埋めて塞ぐわけで、そこでは何らかのつながりのあるものを連想することで埋めることになり、省略－連想－補足という関係が形成されるが、欠落と補足の場合、元々映像や網膜には全てのものが映し出されているわけで、意識外にあるものに焦点を合わせて、意識すればいいだけで、映像や網膜の中で焦点を別のところに移したり、別のところに意識を移したりするので、欠落－焦点移行・意識移行－補足という関係が形成される。厳密に言えば、そう言えるのであって、いつも必ずそうであるとは限らない。例えば、映像に全てが映し出されているとしても、ただ漠然と目的もなく視線を移動させて、焦点を移したり、意識を移したりしているだけでは、焦点をはっきりと合わせることはできず（勿論、視線を移動させている最中に、偶然にも映像の中に興味深いものがあることに気が付き、そこに焦点を合わせることはあるが）、あるものへの焦点を別のものに移行する時、やはりあるもののつながりの中で、連想させながら何があるかを探るということはするであろうし、そうであるならば、欠落－補足の場合でも、連想は起きると言えるであろう。

隣接性が元々空間的位置と空間的距離に基づく隣接であるとしても、何らかのつながりが必要で、弱い、緩やかな連結性が求められるが、あくまでも２つのものの関係であることを考えると、個１つのレベルで見てみれば、ある目的の為に設定され、くくられる、緩やかなつながりであり、設定される目的によって同一の個１つが異なるつながりの中に入れられることになり、１つのものが別のものに関係するつながりが、その別のものがさらに別のものに関係する時、異なるつながりになる可能性があり、さらに別のものが異なるつながりになるという連鎖が起こりうる。例えば、個をａ、ｂ、ｃとし、つながりをＡ、Ｂ、Ｃとすれば、Ａ（ａ－ｂ）→Ｂ（ｂ－ｃ）→Ｃ（ｃ－ｄ）→Ｄ（ｄ－ｅ）→Ｅ（ｅ－ｆ）という連鎖が可能となる。つまり、ａとｂが隣接で、Ａというつながりがあり、またｂとｃが隣接で、Ｂというつながりがあるという具合に続き、連鎖を成すことである。

具体的な例を考えれば簡単に理解できよう。買い物をする時、金額の問題があるので、例えば、100円ショップで買い物をするとしよう。至急必要になったので、あるものａを買いに行くが、同じ棚、例えば、台所用品関係の棚にあるｂも手に取り、また別の洗濯用品関係の棚にあるｃもｂとのつながりで手に取り、同じ洗濯用品関係の棚のｄも手に取り、さらにトイレ用品関係の棚を見て、ｅもｄとのつながりで手に取り、同じトイレ用品関係の棚でｆも手に取るという具合に、しりとり遊びのように、ａからｆまでのものを手に取り、購入するが、それぞれ２つのもののつながりは台所用品関係の棚からトイレ用品関係の棚まで、いくつかの異なるつながりに属するもので、買い物をさらに続けていくと、多数のものを購入することになるが、つながりで言えば、最初の台所用品関係とは全く異なる、そこからは想像がつかないほど、遠く離れた関係の

ものになる可能性はある。そのような隣接性による思考方法に基づく行動様式は、この場合は、隣接的連鎖による消費者の購買行動となるが、極端なケースもあるが、より一般的には、あるものを買いに行って、つい別のものまで買ってしまうという消費者購買行動に端的に現れるものである。

別の例も挙げてみる。隣接性よる消費者購買行動を利用して、経営者側が販売戦略を考える場合がある。例えば、スーパーマーケットなどで、肉売場、魚売場、野菜売場、調味料売場、飲料水売場など、販売品の種類によって売場が分類されている。それでは、何らかのつながりで品物を探す時、いくつもの売場を回らなければならなくなり、不便になってします。そこで、店側は、あるつながりのある複数の品物をまとめて並べることで販売を促進する為、例えば、肉売場に、冬ならば、すき焼きに関する表示をし、肉の傍に別の売り場の商品（例えば、しらたき、ねぎ、豆腐、すき焼き用たれなど）を並べることで、消費者に購入しやすくしたりする。隣接性によるつながりを設定することで販売促進を図ることは、よく見かけることで、スーパーマーケットだけでなく（デパートの地下の食料品売場も同様であるが)、デパートの様々なセクションで行われており、例えば、今流行の夏の節電の為のビジネスマン向けをテーマ（「ビジネスマンの夏の節電対策」とか呼べよう）にし、上着、ズボン、ネクタイ、シャツ、靴、靴下、小物など、節電対策というテーマにつながりのあるものが多数同じ場所に並べられる（時には、マネキンがそれらのものを身につけて展示される)。なお、ここに挙げた２例は、前掲の隣接的連鎖ではなく、あくまでも１つのつながりに属するものの関係で、単なる隣接性の例である。

例からも明らかなように、スーパーマーケットにしても、デパートにしても、商品の種類で売場や棚を分けて、分類する行動は、包摂性による行動であるが、何がどこにあるかを探し出すには明確で、便利であるが、ある目的を持って、その目的達成の為に、複数のものが必要な時は、いくつもの売場を回らなければならないという不部さもある。それに対して、季節、流行、人気、特定商品の売り込みなど、かなり自由に目的を設定し、つながりを作り、テーマを付けてアピールし、販売促進を図る行動は、隣接性による行動であり、かなりの効果が期待できるものである。最近の書店では、作者、ジャンル、図書の種類・大きさなどによって分類し、陳列するのが一般的であるが、あるテーマを設定し、そのつながりに関係する書物を一緒に並べることがある。以上のようなことは、包摂性による思考方法に新たに隣接性による思考方法を追加する行動様式と言える。

次に、包含性による思考方法に基づく行動様式とは、どのようなものであろうか。また、隣接性による行動様式との相違は、何であろうか。

外的隣接性と内的隣接性と区別したように、ある一定の枠が存在し、その枠内に属することが包含性の意味となる。そして、その枠は、自由に設定できる、流動的なものではなく、固定的なものであり、弱く、緩やかなものではなく、強く、厳密なものである。枠組みの成立は、個々のケースで異なり、文化的、歴史的、社会的、論理的、その他多くの要因が考えられるが、個人の意図によっては自由にできない､すでにそこに存在しているものとして捉えられるものと言える。従って、隣接性の場合のつながりのように、流動的で、弱く、緩やかな連結性ではなく、固定的で、強く、厳密な連結性である。その為、枠内にあるものは、枠を構成する要素として、つまり構成要素として、重要なものとなる。例えば、よく使用される例としては、頭、胴体、手、足などの部位と身体、葉、枝、幹、茎、根などの部分と木、各部品と機械などがあり、全体を支える、なくてはならない必要不可欠な部分として位置づけられる。勿論、これらの例は、典型でもあり、厳密でもあり、全ての例がそのように厳密なものではなく、ただ包含性を知る上では、価値のあ

るものと言える。というのは、強いか、弱いか、緩やかか、厳密かなどの相違はあっても、共に連結性であったり、枠であったり、まとまりであったりするわけで、個々の具体的なケースを考える時、隣接性と包含性をどこで区別するかが困難な場合があるからである。

物理的なものから成る全体・部分関係としての包含性は、強い縛りがあることは間違いないわけであるが、２つのものの関係として捉える場合、１つは全体で、もう１つが部分になるが、構成要素としての部分が当然複数あるが、その中のどの部分と関わるかは、かなりの選択幅があり、それだけ許容範囲も大きくなる。そして、その選択幅や許容範囲の為に、誤解が生まれたり、逆に悪用されることも可能となろう。

例えば、デパートの食品売場やスーパーマーケットなどで行われる試食が挙げられる。食品のごく小さな部分を提供し、それを試食して、食品全体を判断するのであるが、異なる部分からできあがっている食品は、どの部分を試食したかによって、全体に対する判断は大きく食い違うことになり、例えば、ちらし寿司の場合は、多くの種類の具材からできており、どの具材を試食するかによって、ちらし寿司の評価が大きく異なってくることになり、また均一のものからできあがっているように見えて、実際は異なる食品は、同様の結果になり、例えば、ローストビーフの小さな部分を試食する時、均一に見えても、場所によっては、脂身が多かったり、筋があったり、固かったり、生に近かったり、全くの均一ではないので、どの部分を試食するかによって、ローストビーフの評価も変わってくるであろう。そこで、悪用すれば、部分と言っても、いろいろな部分があるわけで、特に美味しい部分を試食させることで、その食品全体が美味しいように思い込ませることができるし、実際そのようなケースは、悪意の差はあっても、よく見かけるものであろう。それに近いケースに、私たちは自然と、知らずに、他人に自分を良く思い込ませようと、自分の良い部分だけを見ようとすることがよくあるが、それは悪意というよりは、むしろ本能的な自己防衛かもしれない。

何が問題になっているのか。包含性は、固定的で、強く、厳密な枠が存在し、その枠の構成要素も全て同様であるという前提に立っているが、その構成要素は全てが質的にも（全体の中での部分の位置づけ・ランクづけ）、量的にも（部分が全体の中で占める量的な大きさ）、同一レベルで扱えるものであるとは限らないにもかかわらず、そこに必然性を認めて、同一レベルとして扱ってしまう傾向を持っていることである。部分で全体を知るということは、日常的によく行っていることであり、私たちはいつも部分で全体を認識し、判断し、行動しているとも言えよう。例えば、面接試験などで、数分間という短い時間で、経験、知識、技術、性格、意欲などを調べて、面接官は面接する相手を認識し、判断し、最終的に実際に採用・不採用の決定という行動に出るのであり、そのようなことは人間の行動にはよくあることであり、そうせざるを得ないのである。

類似したものに、工場で大量生産される製品の品質検査の為に、いくつかサンプルを取り出して、検査し、その結果が問題なければ、全てが問題なしとして処理されるケースがある。これは、包含性ではなく、隣接性によるものである。喚喩の例としてよく使用される製造者と製品の関係で、例えば、「昨日、息子が日産を買ったんだ。」と言えば、日産という会社を買ったのではなく、日産製の自動車を買ったことを意味するように、製造者と大量生産される製品の関係は、隣接性によるものとなる。同様に、面接試験の例でも、もし面接官が面接する相手の着ているもの（服装など）身に付けているもの（装飾品などなど）、持っているもの（バッグなど）などで採用・不採用を決定するのであれば、隣接性によるものとなる。つまり、２つのものの関係が隣接性なのか、包含性なのかは、具体的なケースを見ていくと、必ずしも単純明快ではないということである。

包含性の抱える危険性について、もう少し調べてみる。人間の身体の部位、木の部分、機械の部品などの例を典型としたが、そうでない場合が考えられ、部分は知っているが、全体についてはあまり知らなかったり、全く知らなかったり、また全体が大きすぎたり、裏に隠れていて、全てが見えなかったり、位置関係から、全体が見えなかったりする場合がそうである。そのような場合、知っている部分や見えている部分から全体を推測したり、推論したりする。推測や推論をする時は、勿論感覚的に捉えて、勝手に思い込むのではなく、過去の経験、すでに持っている知識、得られる情報などを使用して行うべきである。しかし、実際には私たちは全員がいつもそのような経験、知識、情報を持っているわけではなく、自分勝手に思い込んだり、先生、親、友人などの周りの人に影響されたり、流行や風潮に流されたり、マスコミを鵜呑みにしたりして、思い込んでいるにすぎないことが多くある。それは、隣接性とは異なる点である。元々は空間的位置と空間的距離の関係から、傍に、近くにあるもので、五感的に見えるし、視野に入るからであり、時間的隣接性も同様で、視覚的に視野に入ることはないが、経験や知識で知る範囲にあり、比喩的には、傍に、近くにあるからであり、さらにある目的を設定し、そのつながりに関わるものを緩やかな連結性でまとめただけであって、それだけに相手がその目的を理解できなければ、そのつながりも理解できず、結局２つのものの関係は存在しないのと同じで、前提そのものが消えてしまい、初めから何もなっかたことになってしまうからである。つまり、隣接性の場合は、２つのものが何であるのか、そのつながりが何であるのかを知っている必要があり、それが前提になっているからで、その意味では、包含性の危険性を有さないことになる。

包含性には、全体を知らなかったり、全体が見えなかったりする時に、推測や推論を行うことになるが、そこに危険性が潜んでいるのである。勿論、全体を知っていても、全体が見えていても、部分が全て均一に違いないとか、経験や知識によって、部分と全体の関係がいつもと変わらず、一定していると固定観念的に決めつけたりとかして、結局錯覚や誤解で、全く異なるものであったということも、危険性としてある。

大きな危険性に関して、具体的に例を挙げてみる。マスコミによるニュース報道である。政治、経済、軍事、宗教などに関する問題で、海外で実際に起きた出来事をニュース番組で各社が一斉に繰り返すことで、たとえその出来事が事実であり、従って報道が真実を伝え、意図的にねじ曲げていないとしても、視聴者は繰り返される報道で、しかも各社が一斉に報道することで、その出来事がその国の全体的な流れの一端であると思い込み、その国の人全員がそう思っていると思い込んでしまう。例えば、昔になるが、アメリカで、ジャパン・バッシングの為、日本車を叩き壊す場面（デモ）があったし、最近では、中国で、反日運動のデモや日本関係の店の打ち壊しの場面があったが、繰り返し報道されることで、視聴者はあたかもアメリカ全体がジャパン・バッシングを支持し、実行しているとか、中国全体が反日運動に賛成し、参加しているとか、そう思い込んでしまっているが、実際にはアメリカでも、中国でも、一部の人たちの行動で、国全体を代表するような流れではなかった。マスコミも、実際にあった事実だけを報道し、真実だけを伝えているのであり、全体がそうであるとは決して伝えていないのであるが、マスコミ各社が一斉に、繰り返し報道することで、視聴者はその部分から全体へと推測する時、全く見たことのない、全く知らない全体（アメリカや中国の国と国民について）を経験や知識もなく一気に飛躍していき、部分＝全体という具合に、部分（ある１つの出来事）そのものがそれ自体で全体（国と国民）であるという結果を生み出してしまった。そして、そこまで極端ではないが、同様なことは日常的に起きている。全く見たことのない全体を、全く知らない全体を、経験も知識もなく、推測する場合には、それが日常的な些細なものから国家に関するものまで、いつでも起きる可能性があ

る。

逆のケースも考えられる。全体を知っていたり、見えたりしているが、部分は知らなかったり、見えなかったりする場合である。箱などのように、外からは全体が見えるが、その中の部分が見えなかったり、外側から見れば、全体が何であるか知っているが、その内側については、知らない場合である。機械と部品の関係のように、家電製品や事務機器など、何でもいいが、例えば、電卓を例に取れば、外側（つまり、外見）から見れば、全体が見えるし、それが電卓であることはわかるし、電卓が何であるかも知っているが、内側は勿論見えず、内部の構造はわからないし、各部品のシステムも知らない（たとえ、分解しても、それに関する知識がなければ、中身を見てもわからないであろう）場合である。全体を外見から、電卓であると知り、内部の部品のシステムがわからなくても、構成要素の各部品が働いて、何か電卓というものを形成していると推測するのであり、全体から、たとえ内部の部分が見えず、知らなくても、何らかのシステムによって構成されていると認識し、判断し、行動することになる。そのようなことは、私たちの日常的な行動にもよく現れるものである。１例を挙げれば、人の判断の時、その人の中身については勿論見えず、知らないのに、外見からどのような人であるかを認識し、判断し、それに基づいて行動することが日常的であろう。血液型による人の判断のように、部分から全体の人間を推測するのとは反対に、外見という全体から人間の中身を推測するもので、事実関係はないし、論理的な妥当性もないであろう。誤った推測であることを示す例としては、２つの外見上は電卓に見えるものがあるとして、１つは本物の電卓で、内部も各部品がシステム的に配置されているものであり、もう１つは電卓ではなく、何かを入れるケースで、中にはいくつかのものが入っているものである場合で、前者が包含性の例で、後者が隣接性の例になるが、全体の外見からは中身の部分が推測できないであろう。

もう１つの全体から部分への推測の例は、ある団体や組織に所属し、その一員になると、その個人はどうであれ、世間では、その団体や組織が持っていると考えられる属性や特性をそのままその個人も持っていると推測するケースである。団体や組織が有する属性や特性は、世間の人々が抱いているイメージであって、実際にはそうでない場合もある。ともかく、全体である団体や組織が有する属性や特性（あるいは、単なるイメージ）が、部分である構成メンバーも同様に有し、共有していると推測されることである。典型的な例としては、有名大学や有名企業があろう。例えば、ある有名大学に入学し、学生になると、その個人はどうであれ、世間では、学力的な能力が高く、またそれ以外の資質も高いとされる。勿論、有名大学であっても、学生の学力は上から下までバラツキがあり、学力以外の資質もバラツキがあるのが事実で、個人レベルでは、有名でない大学でも、学力やその他の資質が高い学生は多くいる。そのような例は、頻繁に見られる現象で、幼稚園から大学院までの教育関係、ビジネス関係、政治関係、国際関係などから趣味・娯楽関係まで、全ての領域で、ある特定の、しかもごく一部の団体や組織が特権的な地位を占有し、それに所属し、構成メンバーになることで、所属する団体や組織が有する属性や特性を共有できるだけでなく、それ以上に一体化できることになる（少なくとも、世間では、そのように推測される）。まさに、全体＝部分という推測が成り立つのである。少し話は変わるが、面白いことに、事実関係ではなく、単なる人々の抱くイメージであっても、ある種の相乗効果が生まれることがある。例えば、ある有名な企業に所属することで、構成メンバーはイメージで求められている水準に自ら向上するように努力するし、企業も世間で抱かれているイメージの水準まで、さらに水準以上になるよう企業努力をすることがある。

全体＝部分という推測には、ある種の論理的な飛躍があり、全体だけから、それと部分が同様

であり、共有し、しかも一体化してしまうことがあるが、前掲の例と上記の例の相違は、内部における部分の均一性にある。全体から（全体に関しては、過去の経験や知識があり、知っているとか、視覚的に視野に入っていて、見えていたりする）、内部の部分について、知らなかったり、見えなかったりするだけでなく、知っていたり、見えていたりしても（実質的には、知らなかったり、見えなかったりしているとも言えるが）、どちらでも適用できるのであるが、構成要素である部分が全て均一であると思い込むことである。なお、均一性は厳密に捉えるのではなく、形状や容量から機能まで、その他のものまで、いずれでも構わず、内部が同質的で、共有的で、均一的であることが求められるにすぎない。また、団体や組織に関しては、隣接性と包含性の相違も考えておく必要がある。包含性のケースにおける団体や組織は、構成要素としての意識は高く、構成メンバーのまとまりはよく、結束力も強く、それだけに同質的で、共有的で、均一的な傾向を持ち、従って固定的で、厳密で、持続的な特性を持つことになり、解散は容易でなく、個人が複数の団体や組織に同時に所属することは不可能であり、個人的に辞職することは難しくなろう。それに対して、隣接性のケースにおける団体や組織は、元々バラバラに存在しているものを、自由に、任意に、ある目的を設定して、まとまりを形成するだけで、まとまりが緩やかで、結束力は弱いものとなり、それだけに流動的で、一時的で、可変的であり、目的が達成されたり、中断されたり、断念されたりすれば、解散になるし、また個人が複数の団体や組織に同時に所属することは可能であり、目的に合わなければ、辞職も可能であろう。例えば、サラリーマンで言えば、所属する企業が包含性のケースで、企業内に出来る様々なプロジェクト・チームが隣接性のケースとなろう。

最後の包摂性に関しては、次のところで新たな視点から見直すことにする。

7　新たな思考方法に向けて

包摂性というものが、もし類概念と種概念という種類に関する概念上の分類であるとするならば、意識世界における意識の情報という共通点はあるが、隣接性や包含性にのように、現実世界から五感を通してる意識世界に取り入れられるという外界からのルートを経由するのではなく、あくまでも意識世界において、個々バラバラに存在しているものを人間の都合に合わせて、理性的に何らかの基準を設けて分類するのであり、その意味では、私たち人間の都合で自由勝手に創作したものであり、それだけに脆さもある。分類の対象になるのは、意識世界にある全ての意識の情報で、現実世界から感性によって取り入れられる感性的なものから、理性的手段によって取り入れられたり、理性的操作によって作られたりする理性的なものまでとなるが、五感によっては直接知覚できない物理的なもの（宇宙の果てにある存在物など）であるとか、属性が不確定的なものとか、例外はあるが、ほとんどの場合、分類できるし、実際にしているのであり、しかも基準の修正・追加・削除・入れ替えなどによって、種類分け、区分け、仕分けを変更することができるのであって、分類の変更可能性という可変性は、まさに人間の創作物であり、理性的操作であることの現れであろうし、人間の都合に合わせて自由に基準が設定できることから派生しているのであろう。

現実世界における隣接性と包含性という２者は、それらが意識世界に取り入れられ、それに包摂性が追加されて、３者になる。それら３者は、意識世界では、全て意識の情報として同一次元で扱われることになり、人間にとって操作しやすく、処理しやすいものになるが、操作・処理の対象が３者以外でも、何でもよくなり、そこに混乱・混同を生み出し、誤解が生まれる危険性がある。上記の自由な分類の設定可能性による脆さに、この分類対象の無条件性による混乱・混同

も加わり、意識世界における危険性は増加することになる。そして、それが現実世界で現実化して、具体的な行動様式に現れてくる。極端な例として、最近の問題になっている風評による買い控えという行動であろう。

意識世界における自由さは、脆さと混乱・混同という否定的な側面を生み出す一方で、自由な発想、発見、発明などのように、束縛なく、新たな組み合わせ、新たな連鎖、新たな飛躍というものを可能にさせる。そこで、自由な発想で考えて、レイコフとグループ・ミューを見てみる。

レイコフの喚喩（提喩自体の独立した存在意義は認めない）という隣接性のみによる説明の可能性は、どうなのであろうか。隣接関係も全体・部分関係も、空間的距離だけでなく、空間的位置を考慮するから、区別するのであって、空間的距離だけで考えて、空間的位置を重視しなければ、外的隣接性と内的隣接性という区別の仕方が可能であり、両者はあくまでも隣接性の中に取り入れられたものとしてあるにすぎないとも言えよう。しかも、隣接性を意識世界の中で捉えれば、物理的なものと概念的なものの区別は必要なくなり、全てが意識の情報として同一次元で扱えるものになる。そのように考えると、意識世界の中で隣接性を捉えれば、レイコフの主張も十分説得力のあるものになろう。

グループ・ミューによる隠喩の提喩への分解の説明の可能性は。どうなのであろうか。例えば、一般的には白雪姫は隠喩と捉えられているが、２回の提喩によって解釈可能であろう。雪の白さと姫という人間の女性の肌の白さが類似していると捉えれば、隠喩ということになるが、ものの白さ（類概念－上位概念）の中には、雪の白さ、紙の白さ、壁の白さ、服の白さ、餅の白さ、女性の肌の白さなど、個々のものの白さ（種概念－下位概念）があり、そこでまず雪の白さとの関係で包摂性が成り立ち、次に女性の肌の白さとの関係で包摂性が成り立つことが導き出され、結局雪の白さ－ものの白さ－女性の肌の白さという過程で、つまり提喩を２回繰り返すことで説明でき、隠喩は必要ないことになる。一般的には２つのものの関係から、類似性を導き出し、そのことで隠喩として捉えるのであり、言い換えれば、現実世界において、五感を通して直接得られる２つのものの関係に重心を置くのであり、別の第３者を媒介にするわけではないのであるが、それを意識世界に重点を置くことで、種類分けという包摂性によって３者の全体像が見え、そこから捉えれば、２回の提喩＝隠喩という図式が可能となる。意識世界における理性的な処理によって可能になるのであって、雪の白さと女性の肌の白さを直接見て、それらを感性的に処理する限り、概念的な処理は出てこないであろう。

もし意識世界で理性的に処理するつもりであるならば、そこでは全てのものが意識の情報として対象にできるので、あらゆるものが理性的に処理され、種類分け、区分け、仕分けという分類を行い、しかも自由にその基準を設定すれば、何でも可能になるであろう。だからこそ、自由な発想、論理的な飛躍、突飛な発想・行動なども可能になるのである。

さらに、具体例を挙げて、意識世界における負の連鎖とも言うべきものについて、検討しよう。包含性と包摂性は、コインの裏表のように、物理的世界における包含性が意識世界における包摂性へと移行した関係として捉えられる傾向が強いが、隣接性との関係は、どうなるのであろうか。飛行機事故による大惨事を想定してみよう。もしある特定の航空会社（A社）のある特定の飛行機（a機）の機体の構造上のミスや部品の欠陥・磨耗などによるミスで事故が起きたならば、包含性によるものとなるが、意識世界では、そこで留まるのではなく、本人の過去の経験や知識による情報、マスコミなどが流すデータによる情報など、人は様々な情報を使用して、認識し、思考し、判断し、行動するわけで、そこで何らかの情報で、a機だけでなく、b機も、c機も、d機も同様の危険性があり、同一機種の飛行機全体に拡大し、また別の機種の飛行機を含む飛行機

全体へと拡大し、さらには船舶、鉄道、地下鉄、バスなどにも波及し、乗り物全体へと拡大していく可能性があり、そのような危険性に対する判断が不安を生み出し、不安の連鎖とも言える負の連鎖が起き、不安が拡大する。勿論、以上のことは、あくまでも意識世界でのことで、それがすぐに直接的に行動になって実際に現れるわけではないが、不安の連鎖のどの段階で実際の行動に出るかは、条件によって異なってくるが、不安の為、飛行機に乗ることを控えるという行動に出る人はいるでしょうし、行動にまで出なくても、意識世界の奥深く沈殿し、いつかまた何らかの形で現れる人もいるでしょう。

もしA社のa機を操縦するパイロットのミスや整備する整備員のミスで事故が起きたならば、隣接性によるものとなるが、何らかの情報から、A社の企業体質が原因であると考え、A社の全ての飛行機にも同様の危険性があるという不安が生まれ、また航空業界における競争激化により、経営的な圧迫が強まり、経費削減に向かい、安全管理が軽視されているという情報があれば、同一の航空業界におけるB社やC社にも拡大し、業界全体に波及し、さらには同様の経営状態にあり、同様の企業体質があると思われると、船舶、鉄道、地下鉄、バスなどの他の業界にも広がり、乗り物関連業界全体へと拡大する可能性はある。ここでも、危険性に対する不安が次から次へと連鎖し、負の連鎖が生じる。勿論、意識世界に広がった不安の連鎖がどこまで実際の行動になって現れるかは、条件によって異なってくるが、乗ることを控える人が出てくることは、あるでしょう。

A社のa機という1つの特定の飛行機から始まって、乗り物全体へと広がる不安の連鎖は、全てが事実関係に基づいているわけではなく、最初のA社のa機の事故は事実であるが、その後の連鎖は意識世界における人間の連想によるもので、意識世界において、分類は概念上の範疇にすぎず、種類分け、区分け、仕分けを容易に変更したり、飛び越えたりでき、その線引きが弱く、脆いものであることの証明であろう。

上記の2例は、隣接性も、包含性と同様に、包摂性と結びつくということを示している。しかし、3者を比較すると、どのような関係のシステムが明らかになるであろうか。最初に、包摂性は、上位概念と下位概念という縦の思考で、2つのものの関係を見る時、類と種という縦の関係で捉えて、包摂性と呼ばれるわけであるが、横の思考で、同一の種類に属する2つのものを横の関係で見ると、そこには類似性が存在する。いくつかのものを1つの種類としてまとめる為には、ある一定の基準を設定し、それぞれのものの属性がその基準を満たすかどうかで決められる。もしあるものの属性と他のものの属性が全て一致すれば、同一のものになってしまうのであり、あくまでも属性の一部が基準を満たすという点で一致する場合に、つまり、類似性が存在する場合に、1つの種類としてまとめることができる。

次に、包含性については、例えば、パソコンのように、同一部品だけから構成されていることはあり得ず、また同一部品が複数使用されるにしても、高機能の部品1つに置き換えられるようになるし、類似の部品が複数使用されるにしても、1つにまとめられるように、多機能の部品1つに置き換えられるようになるし、そのように考えると、異なる種類の機能を持つ異機能の部品を複数使用することで、異なるが故に生まれる効果という相乗効果を狙ってパソコンが設計され、製造されると言えよう。そこでは、横の思考でいけば、相違性に基づく関係が中心になっている。

もしそのように考えられるとするならば、2つのものの関係、しかも横の関係で見ると、包摂性は類似性に基づき、包含性は相違性に基づくと言える。それは、縦の関係から見れば、両者とも全体・部分性になるが、横の関係で見ると、類似性と相違性という食い違いが浮かび上がってくる。その意味では、両者がコインの裏表の関係にあるという表現は正確ではなくなるであろう。

具体例の分析を通して、読み取れるのは、物理的世界における隣接性と包含性が、意識世界に取り入れられ、そこに隣接性と包含性が意識の情報として位置づけられ、それに他の様々な情報が加わり、全ての意識の情報を対象に包摂性が働くという構造であり、隣接性と包含性と包摂性が並列的に、直接的に結びついている構造ではないということである。

結びの言葉として、簡単に付け加えるとすると、意識世界の構造を分析し、意識世界という視点から見ることで、既存の思考方法を見直したり、新たな思考方法を作り出したりすることができるということになる。そして、意識過程の結果として、言語的行動となって現れるのが言語表現としての比喩であり、非言語的行動となって現れるのが私たちの日常的な実際の行動であり、喚喩と提喩の見直しの必要性も、風評などによる買い控えなどの行動様式の見直しの必要性も、共に同じことから派生してきたものである。

8　最後に

意識世界から展望してきたが、そこで見出される重要性はいくつもある一方で、今でも従来型の比喩の分類が世界的に継続しているのには、それなりの意味がある。私たちが現に生活している現実世界は、五感によって知覚できる実体のある物理的世界であり、あくまでもそこに全ての原点があり、そこを中心にして、全てが回っているという実感を抱いており、そのようなものとしてあるという信念を持っているからである。そうした実感や信念は非常に強いもので、それが良いか、悪いかは別にして、またそれが正しいか、間違っているかは別にして、人々はそう感じ、そう考え、そう行動しているのであり、それらの点を明確にすることは、意義のあることであろう。

(注)

(1) 村越行雄、「隠喩・換喩・提喩―言語表現の考察―」、跡見学園女子大学紀要第32号（1999）

(2) John R.Searle, “Metaphor”, in Andrew Ortony（ed.）, *Metaphor and Thought*（Cambridge University Press, 1979）

(3) グループ・ミュー、『一般修辞学』（大修館書店、1993）

(4) George Lakoff, “The Contemporary Theory of Metaphor”, in Andrew Ortony（ed.）, *Metaphor and Thought*（1979）

(5) 佐藤信夫、『レトリック感覚』、（講談社、1978）、瀬戸賢一、『認識のレトリック』、（海鳴社、1997）

(6) グループ・ミューの『一般修辞学』、佐藤信夫『レトリック感覚』、瀬戸賢一『認識のレトリック』などで展開されている見解。

(7) 村越行雄、「多文化コミュニケーション論の基本的特徴について」、跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科紀要創刊号（2007）、村越行雄、「特定文化から見るコミュニケーション―所属文化と共有文化による人間関係の分析―」跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科紀要第４号（2010）、村越行雄、「近代日本における多文化性とコミュニケーション」、跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科紀要第５号（2011）などを参照。

(8) グライスの会話含意理論に基づくもので、一般的には「含意」と言われているものである。なお、比喩と含意は、根本的には異なるものである。

(9) 瀬戸賢一氏の著書からの例を使用する。

(10) ここでも、瀬戸賢一氏の例を使用する。

(11) センス・データに関する議論で、分析哲学者である Russell, J.L.Austin などによって問題化されたテー

マである。

(12) J. L. Austin が言語（speech）と行為（act）という異質なものを組み合わせて、言語行為（speech act）という概念を作り出し、言語行為理論を構築した。その後、John R. Searle が言語行為理論を確立した。